

スラックラインをケーブル発のスポーツコンテンツへ



昨年9月、長野県小布施町で「2017スラックラインワールドカップジャパン『フルコンボ』(以下スラックラインW杯)」が開催された。須高ケーブルテレビ(株)(長野・須高市、丸山康照社長、以下須高ケーブル)は、企画当初から運営に参画し、資金調達、4K制作・中継やネットLIVE配信、放映権の管理等を担い、本大会を成功に導いた。この取り組みは「スラックラインW杯開催による地方創生」として、「ケーブル・アワード2018」でグランプリを受賞。そこで、須高ケーブルの丸山社長とスラックラインW杯実行委員長の林映寿氏に、本大会立ち上げの経緯から今後の展開まで話を聞いた。

丸山康照氏
須高ケーブルテレビ(株) 代表取締役社長



林 映寿氏
(一社)スラックライン推進機構 代表理事/浄光寺 副住職

子どもたちが世界に触れる舞台を作りたい

小布施町が「スラックラインの聖地」と呼ばれているのはご存知だろうか。小布施町で600年以上の歴史を誇る浄光寺、その副住職を務める林映寿氏が2013年に、お寺の敷地にスラックラインの練習場を作り、無料開放したのがその始まりだ。通い始めた地元の子供たちはどんどん上達し、数年後には国際的に活躍する選手たちが誕生(ちなみに林氏の息子、林映心くん(10歳)もすでにプロのライダーとして世界で活躍している)。多くのマスコミにも取り上げられ、海外のライダーたちも浄光寺を訪れるようになり、いつしか小布施町は「スラックラインの聖地」として世界に知られるようになったのだ。

「成長していく子どもたちを見ていたら、もっと世界に触れる舞台を作ってあげたい、それが僕たち大人の役割なんじゃないかと思うようになりました」と林氏は振り返る。そして、やるなら「世界最高峰の大会」にチャレンジしようという決意。いきなりW杯開催を企画するとは無謀にも思えるが、「スラックラインW杯はア

ジアでも開催されることがなく、誰かに教えるを乞うこともできず、手探り状態でした。でも、子どもたちに「夢をもって何にでも挑戦しなさい」と言っている僕たちが、前例がないからといって、挑戦する前にあきらめることはしたくなかった」と語る。

こうして始まったスラックラインW杯開催への挑戦だが、林氏は「多くの人に知ってもらうために、まずは『テレビ』に映してもらい必要がある」と、さっそく須高ケーブルに相談を持ちかけた。

林氏からこの話を聞いた須高ケーブルの

丸山社長は、「はじめは、無茶な企画だと思いましたね(笑)」と明かす。「林さんが強い思いを持っているのは感じましたが、運営方法や審査基準、資金、中継方法等全てがほぼ白紙の状態でした」。それでも丸山社長が乗り出したのは、「林さんの熱意はもちろん、小布施町でスラックラインに関わる人たちが子どもたちからお年寄りまで一のがんばっている姿があったから」だという。そして、須高ケーブルが運営からサポートすることを決め、開催に向けて動き出した。

林氏の自撮り「全力動画」が功を奏しクラウドファンディング目標金額達成

須高ケーブルが運営について試算すると、3,000万円ほどかかることがわかり、資金集めが始まった。小布施町や長野県、地元企

業等からの協賛に加え、ちょうど立ち上がったケーブルクラウドファンディング(運営:日本デジタル配信(株)、以下JDS)にトライするこ

とになった。

目標金額は500万円。だが、クラウドファンディングを始めて55日で70万円弱しか集まらない。期限までのあと10日で430万円が必要だった。関係者の間で「さすがにもう無理だろう」というムードが漂いはじめたとたん、林氏にスイッチが入った。そこから林氏の自撮り動画のアップが始まった。

はじめは「どうしても大会を開催したいので、ご協力よろしく願います」のメッセージ動画を、林氏のFacebookとスラックラインW杯公式のFacebookでアップした。すると一晩で200を超えるシェアがあり、55日間で集ま

混成60人による「チーム4K」で15時間の4K生中継を実現

このスラックラインW杯は、ケーブルテレビ業界共通の「ケーブル4K」(運営:JDS)で、長時間生中継された。丸山社長は、「スラックラインは選手一人ずつ技を披露するため、激しいカメラワークが必要なく、4K撮影に適したスポーツ。これまで『ケーブル4K』で長時間のスポーツ生中継をやったことがなかったこともあり、JDSにも相談して、2日間で計15時間の4K生中継にトライしました」と説明する。なお、須高ケーブルだけではスタッフが足りないため、協力を仰いだところ、県内外のケーブルテレビ、地上波、制作会社からスタッフが駆けつけ、総勢60人、運営を含め延べ100人が集結した。「経験も技術もバラバラな混成チームでしたが、小布施という地域を大切にしたいこと、本大会が一過性ではないこと等を伝え、想いを共有してもらいました。おかげで、素晴らしい「チーム4K」ができあがりました。地上波の技術や経験豊富な4Kカメラマ



「ケーブルコンベンション2018」のJDSブースの前でスラックラインW杯を共に運営した須高ケーブルテレビのスタッフと

た金額と同じ額が、24時間で集まったのだ。動画アップは1回だけのつもりだったが、反響の良さに感激し、お礼の動画をアップ。すると「明日の動画も期待しています」のメッセージが届くように。林氏はその期待に応えるべく、山の中の階段を駆け上がった、駆け下りたり、幅5cmのスラックラインを自転車で渡ったり(成功するまでに股間を100回ほど強打したという)、3トンのキャンピングカーをロープで引いたり、標高1,500mで滝に打たれたり…と、体当たりの「全力動画」を連日アップ。すると、最終的に目標金額を上回る560万円が集まった。「滝はものすごい反響で、一気に目標

ンとの共同作業など、弊社はじめ全国のケーブル局の若いスタッフにはとてもいい勉強になりました」(丸山社長)。

なお、スラックラインW杯の放映権については、須高ケーブルが一括管理を任されているため、地上波、BS、CS、ケーブルテレビ、全ての放送について、須高ケーブルが窓口となっ

今年9月はジャパンカップ、来年は再びW杯 2028年ロス五輪での正式種目化をめざす

今年9月16日に、小布施町で「ジャパンカップ」を開催する。今回は年齢も性別も経験も不問、アクティブクラス500円、ハイクラス1,000円、スーパークラス2,000円というエントリーフィーで、誰でも出場することができる。林氏は「我々は2028年ロス五輪での正式種目化を目指しています。そのためには、選手を増やし、応援する人も増やしていかなければなりません。今回のジャパンカップは、裾野を拡げることを目的としています」と説明する。なお、エントリーフィーは、今年7月の西日本集中豪雨の被災地に寄付するという。

また現在、NHKと須高ケーブルが連携して、スラックラインと地方創生といった内容の番組の制作が進められている。この番組は、

金額が達成できました。また、インターネットでの課金方法がわからないから、と現金を届けてくれたおばあちゃんたちもいて、それだけでも合計100万円になりました」(林氏)。

こうして資金の目処もたち、米国の国際ジャッジ団体からの許可も下り(※)、2017年9月17日・18日の2日間、台風一過の明るい青空のもと、アジア初のスラックラインW杯が小布施町で開催された。準備期間はたったの10カ月間だった。

(※)ジャッジ団体からの許可は2016年12月に取得



幅5cmのスラックライン上で華麗な演技を見せる小布施町のライダー(「2017スラックラインワールドカップジャパン『フルコンボ』」より)

た。この他、Facebook LIVEやYouTube LIVEでのインターネット生配信も実施された。

NHK Worldを通して世界へ、NHK長野放送局から長野県内、そして須高ケーブルは地元地域とAJC-CMSを通じて全国のケーブルテレビへと、さまざまなレイヤーで広く放送される予定である。

丸山社長は「ケーブルテレビと地域がゼロから作り上げたスポーツコンテンツがメジャーになり、オリンピックの正式種目になったら、新しい展開が見えてきます。オリンピックでの正式種目化に向けては、やらなければならないことはたくさんありますが、ひとつひとつスピード感をもってやっていきたい」と語る。

まずは来年、再び小布施町でスラックラインW杯を開催することが決定している。 **B**